

# 明清期白話作品における「奴」についての考察

孟 子敏 増野 仁

## 前書き

「奴」は女性の自称代名詞と見られる。しかし、女性にとって、「奴」は自由に使い得る語彙なのであろうか、換言すれば、女性が、誰でもいつでも「奴」を使うのであろうか。また、「奴」は一般的な自称なのであろうか。本稿では、まず『金瓶梅詞話』を中心として検討を行い、さらにその結果を踏まえ、明代の『三遂平妖伝』および清代の『桃花扇』・『紅樓夢』における「奴」をも検討する。

## 1. 自称詞「奴」の歴史について

「奴」という第一人称代名詞は、およそ唐代から使われ始めた。「拏」字で書かれることもあり、また、「奴」を形態素とする「奴家」も見られる。

- (1) 異方歌楽，不解奴愁。別域之歛，不令人愛。（『敦煌變文集・王昭君變文』）
- (2) 第一女道：“奴家美貌，實是無雙。不合自誇，人間少有。”（『敦煌變文集・破魔變文』）
- (3) 我緣一國帝王身，眷屬由來宿業因。爭那就中容貌差，交奴恥見國朝臣。（『敦煌變文集・丑女緣起』）
- (4) 圍繞佛身千萬匝，擬捉如來暢拏（拏）情。（『敦煌變文集・破魔變文』）

以上の例文の中で、「奴」は女子自称としても使われる。たとえば例(1)、(2)。また、「奴」は男子自称としても使われる。たとえば例(3)、(4)。これら

から見ると、当時、男女ともに「奴」で自称することができたのである（呂叔湘 江藍生 1985）。しかし、宋代以後、「奴」は女性の自称専用となった（馮春田 2000）。そのような「奴」には「奴奴」という形式もある。

- (5) 奴正青春，你又方年少。（董解元『西廂記』）
- (6) 翠蓮便道：“丈夫，丈夫，你休氣，聽奴說得是不是？多想那人没好氣，故將豆麥撒滿地。倒不叫人掃出去，反說奴家不賢惠。”（『快嘴李翠蓮記』）
- (7) 翠蓮道：“爹休嚷，娘休嚷，哥哥、嫂嫂也休嚷。奴奴不是自夸獎，從小生來志氣広。”（『快嘴李翠蓮記』）
- (8) 乃引一小女子前拜已，戎服見太后等泣曰：『奴肅王小女珍珍也。』（『新刊大宋宣和遺事』）
- (9) 這狀元，是奴夫婿，奴是它親娶妻。（『張協狀元』）
- (10) 剪頭門子將奴打，後來卻把奴家罵。（『張協狀元』）

## 2. 『金瓶梅詞話』における「奴」

『金瓶梅詞話』において、多くの「奴」（「奴家」を含む）が使われている。この作品では、登場人物の多くが女性であるため、「奴」のこのような使用状況が見られるのであると思われる。「奴」の出現回数は368で、「奴家」は35である。「奴」の言語環境は主に会話文であるが、詞曲の中で「奴」が使われる例もある。「奴」で自分を指す人物は全員女性である。

- (11) 那婦人連聲叫道：“叔叔却怎生這般計較！自家骨肉，又不服事了別人。雖然有這小丫頭迎兒，奴家見他拏東拏西，蹠里蹠斜，也不靠他。”（001/16a/03\*～05）
- (12) 寫了一首寄生草詞曰：將奴這知心話，付花箋寄與他。想當初結下青

---

\*001/16a/03は、「『金瓶梅詞話』第1回目、第16葉の前半、第3行目」を意味する。前半はaで表示、後半はbで表示する。

絲髮，門兒倚遍簾兒下。受了些沒打弄的耽驚怕。你今果是負了奴心不來，還我香羅帕。(008/04b/02～06)

(13) 打的婦人疼痛難忍，眼噙粉淚，沒口子叫道：“好爹爹！你饒了奴罷！你容奴說，奴便說。不容奴說，你就打死奴，也只臭烟了這塊地。這箇香囊葫蘆兒，你不在家，奴那日同孟三姐在花園裡做生活。因從木香欄下所過，帶兒繫不牢就抓落在地。我那裡沒尋！誰知這奴才捨了。奴並不會與他。”(012/09b/02～07)

(14) (李瓶兒)：“你早把奴取過去罷，省的奴在這裡晚夕空落落的，我害怕。常有狐狸鬼混的慌，你到家對大娘說，只當可憐見奴的性命罷。隨你把奴做第幾個，奴情願伏侍你，鋪床疊被，也無抱怨。”(016/06b/07～10)

(15) 那李瓶兒雙手攙抱着西門慶脖子，嗚嗚咽咽悲哭。半日哭不出聲，說道：“我的哥哥，奴承望和你並頭相守，誰知奴家今日死去也！趁奴不閉眼，我和你說幾句話兒。”(062/17b/03～05)

例(11)は潘金蓮の武松に対する発話で，(12)は潘金蓮が西門慶に送った詞である。(13)は潘金蓮が西門慶に殴られたときの発話である。(14)，(15)は李瓶兒の西門慶に対する発話である。女性にとって，「奴」は自由に使う語彙なのであろうか，換言すれば，女性が，誰でもいつでも「奴」を使うのであろうか。また，「奴」は一般的な自称なのであろうか。ここで，「奴」に対して語用論的考察を行なってみることとする。

### 3. 「奴」に対する語用論的考察

#### 3.1. 「奴」を使用して発話した人物

一般的に言えば，「奴」は女性が自称する際の謙讓語である。北方方言において，六朝時代に「奴」は謙讓語として使われるようになったが，唐代に入ると，一般的自称代名詞となった(呉福祥 1999)。しかし，「奴」がそのような自称代名詞になったかどうかはさらに検討する必要があると思われる。まず，「奴」

を使って話した人物を挙げて、「奴」の使用状況を分析してみる。詞曲で「奴」を使って歌う人物はここでは除外する。また、検討に際して、発話者・聞き手を明記する。発話者は「奴」を使った人物の登場した順に出てくる。聞き手はまとめてある。さらに、必要がある場合、発話者・聞き手の身分およびその他の重要な情報を記入する。聞き手がいない場合、「独り言」で表示する。

表1「奴」を話した人物表

発話者	聞き手
1. 潘金蓮 (西門慶の妾)	独り言, 武大郎 (潘金蓮の元夫), 武松 (武大郎の弟), 西門慶, 王婆 (潘金蓮の隣近所にいる人), 何九 (検死する人), 玳安, 陳經濟 (西門慶の娘婿), 李瓶兒, 秋菊 (潘金蓮の小間使), 春梅
2. 孟玉楼 (西門慶の妾, 李衙内の妻)	西門慶, 張四舅 (孟玉楼の夫の舅), 玳安 (西門慶家の召使い), 瞎子 (占う人), 潘金蓮, 独り言, 呉月娘, 陳經濟, 李衙内 (孟玉楼の三番目の夫)
3. 李瓶兒 (花子虚の妻, 西門慶の妾)	西門慶, 花子虚 (李瓶兒の元の夫), 潘金蓮, 呉月娘, 李嬌兒 (西門慶の妾), 馮媽媽 (李瓶兒の小間使), 蔣竹山 (医者, 李瓶兒家に入った婿), 喬大戸娘子
4. 呉月娘 (西門慶の妻)	李瓶兒, 西門慶, 春梅, 孟玉楼, 雲離守 (西門慶の友人, 世襲した官吏)
5. 宋惠蓮 (來旺の妻・西門慶の愛人)	西門慶, 來旺 (西門慶家の召使い)
6. 王六兒 (韓道國の妻・西門慶の愛人)	馮媽媽, 西門慶, 陳經濟
7. 李桂姐 (西門慶が専有する娼妓)	呉月娘

次頁に続く

8. 春梅 (呉月娘の小間使, 潘金蓮の小間使, 周守備の妾)	潘金蓮, 周守備 (官吏, 春梅の夫), 大妗子, 呉月娘
9. 孫雪娥 (西門慶の妾)	来旺
10. 玉簪 (李衙内家の小間使)	李衙内 (孟玉楼の夫・玉簪の主人)
11. 金寶 (陳経済の妾)	陳経済
12. 韓愛姐 (陳経済の愛人)	陳経済, 春梅, 翠屏 (陳経済の最後の妻), 婆婆 (作業員のために食事を作ってあげる人), 韓二 (韓道国の弟, 話しているとき, 韓愛姐は韓二が誰であるのか分かっていない)

『金瓶梅詞話』で、登場してその発話が記録されている女性はほぼ80人いる。地位が高い人から、一般庶民や地位が低い人に至るまで全て見られる。だが、表1によると、「奴」を使用して発話する女性は12人しかいなく、80人のうち約1割のみである。この事からいうと、「奴」はすべての女性が使用するという状況にはなく、ごく一部の女性だけが「奴」を使用して発話するのであるということとなろう。

それでは、どのような意識を表し、どのような女性が、どのような聞き手に対して、「奴」を使用して発話するのであろうか。

### 3.2. どのような意識を表すのか

まず、謙讓語として使用される「奴」は、話しての女性が聞き手に対して、「私」が「あなた」の下の地位にいるということを表す。つまり「ワタシ」が「アナタ」に従属する気持ちを伝えるということである。「奴」が含まれるセンテンスはすべてこれに属する。これは「奴」の基本的な意味である。ここでは例文を省略する。ここで注意しなければならないのは、女性が夫を嫌っている場合

にも、「奴」を使って自称することである。たとえば、潘金蓮が武大郎に対して、李瓶児が花子虚に対して、「奴」を使って自称している例である。

(16) 潘金蓮：婦人道：“呸！濁才料！把奴的釵梳湊辦了去，有何難處？”  
(001/12b/10)

(17) 李瓶児：罵道：“呸！魍魎混沌！你成日放着正事兒不理，在外邊眠花臥柳，不着家。只當被人所算，弄成圈套，拿在牢裡，使將人來對我說，教我尋人情。奴是個女婦人家，大門邊兒也沒走，能走不能飛，曉的甚麼，認的何人？”(014/06a/10～06b/02)

次に、女性が、聞き手(男性)のことを好いてはいるが、改まった発話をするとき、「奴」を使う例である。たとえば、潘金蓮、李瓶児が最初に西門慶に会ったとき、「奴」を使用している。ここで、潘金蓮が武松と話しているときに使用した自称の例を取り上げて分析してみる。

潘金蓮と武松との会話のうち、合計すると、11回の「奴」(「奴家」を含む)、8回の「我」が用いられている。潘金蓮が武松と初対面のときには、「我」は使われず、すべて「奴」が使われている。たとえば、例(18)、(19)、(20)である。しかし、潘金蓮は、武松に対しては「奴」を使っていながら、逆に武大郎に対しては「我」を使っている。たとえば、例(21)である。潘金蓮が武松と懇意になったあと、感情をストレートに表現するときには、「奴」は使わず、「我」を使っている。たとえば、例(22)、(23)、(24)である。また、いちゃつこうとして、逆に武松に叱られ、腹が立ち、武松に対して「我」を使って話したりもしている。たとえば、例(25)である。しかし、十日後、武松が出張するため、武大郎の家に帰って、兄嫂と別れを告げる際、潘金蓮は「莫不這厮思想我了，不然卻又回來」というような誤解をした。この際、潘金蓮は武松に対して、やはり「奴」を使っている。これは例(26)のような様子である。当然のことながら、結局、潘金蓮は失望し、怒ることになり、「我」に切り替える。たとえば例(27)である。潘金蓮と武松との最後の対面は、西門慶が死亡して、潘金蓮が追い出された後のことである。そのとき、潘金蓮が「舊心不改，心下暗道：這段姻緣

遷落在他家手裡」と思い、武松に対して「奴家」を使うのである。たとえば例(28)である。ここでは、さらに厳しい状況が発生する。武松が「掣出一把二尺長刀，薄背厚背扎刀子來」ということをしたので、潘金蓮は興奮した結果、「奴」を使わずに、「我」を用いたのである。たとえば例(29)である。このような二転三転の状況の変化によって、「奴」と「我」は交替するのである。以上のようなことから見ると、「奴」の伝達する意識は明らかとなる。

「奴」:

(18) 婦人扶住武松道：“叔叔請起！折殺奴家。”(001/13a/10～11)

(19) 一家里住，早晚要些湯水吃時，也方便些。就是奴家親自安排與叔叔吃，也乾淨。(001/14a/02～03)

(20) 那婦人便道：“奴等了一早辰，叔叔怎的不歸來吃早餅？”(001/17a/10～11)

「我」:

(21) 那婦人應道：“你看那不曉事的，叔叔在此，無人陪侍，却交我撇了下去！”(001/14b/06～07)

(22) 說道：“我聽得人說，叔叔在縣前街上養着個唱的，有這話麼？”(001/18a/03～04)

(23) 叔叔！你不會簇火，我與你撥火！(001/18b/03)

(24) 看着武松道：“你若有心，吃我這半盃兒殘酒！”(001/18b/06)

(25) 說道：“我自作婁子，不值得便當真起來，好不識人敬！”(001/19a/02～03)

「奴」:

(26) 婦人拜道：“叔叔不知怎的錯見了？好幾日並不上門。交奴心裡沒理會處。”(002/02a/01～02)

「我」:

(27) 發話道：“既是你聰明伶俐，恰不道長嫂為母。我出嫁武大時，不曾聽得有甚小叔。那里走得來？是親不是親，便要做喬家公。自是老娘悔氣

了，偏撞着這許多鳥事！”(002/03a/06～09)

「奴」

(28) 舊心不改，心下暗道：這 姻緣還落在他家手裡。就等不得王婆叫他，自己出來，向武松道了萬福，說道：“既是叔叔還要奴家去故管蠅兒，招女婿成家，可知好哩！”(087/06b/02～04)

「我」

(29) 那婦人道：“叔叔如何冷鍋中豆兒炮，好没道理！你哥哥自害心疼病死了，干我甚事！”(087/08b/07～08)

### 3.3. どのような女性が「奴」を使うのか

まず、表1における12人の中で、潘金蓮、孟玉樓、李瓶兒、吳月娘、宋惠蓮、王六兒、孫雪娥、金寶、韓愛姐のような既婚者である発話者は9人である。この9人の中で、潘金蓮、李瓶兒による「奴」の使用例が最も多く、孫雪娥、金寶によるものは最も少ない。ここで、各人各1個の例文を挙げてみる。

(30) 潘金蓮：金蓮道：“可知好哩！奴巴不的騰兩間房與他住。”(016/07a/08)

(31) 李瓶兒：李瓶兒道：“奴在三娘手裡吃了好少酒兒？已却勾了！”  
(014/11a/08)

(32) 孟玉樓：玉樓悄瞞著月娘與了他一封金碗簪子，一套翠藍段襖，紅裙子。說道：“六姐，奴與你離多會少了。你看個好人家往前進了罷！自古道千里長蓬，也沒個不散的筵席。你若有了人家，使人來對奴說聲，奴往那裡去，順便到你那 里看你去。”(086/11a/08～11b/01)

(33) 吳月娘：月娘說：“既是各人心裡事，奴也管不的許多。”(091/04a/09)

(34) 宋惠蓮：夫人摟抱着西門慶脖子，說道：“我的親達達！你好歹看奴之面，奈何他兩日，放他出來。”(026/06b/04～06)

(35) 王六兒：婦人道：“達達！只怕後來耍的絮煩了，把奴不理怎了？”  
(038/05a/04～05)

(36) 孫雪娥：雪娥獨自悄悄和他打話：“你常常來走着，怕怎的？奴有話教

劉昭嫂子對你說。我明日晚夕，在此儀門裏紫墻兒跟前耳房內等你。”

(090/06b/07 ~ 09)

(37) 金寶：金寶便說：“奴就在這橋西酒店劉二那裡。”

(093/13a/07 ~ 08)

(38) 韓愛姐：愛姐便說：“此是奴家這幾日盼你不來，閑中在樓上作得幾首詞。”(099/02a/02 ~ 03)

李桂姐，玉簪，春梅たちの発話は詳細な分析を加えなければならない。李桂姐は西門慶が専有する娼妓で，最初に西門慶と交際しているときには，「奴」は一貫して使用していない。西門慶が副提刑になったあと，コネをつけるため，さらに呉月娘と義母・義女という関係を結んだが，それからはほかの娼妓と比べると，李桂姐が既婚者であるような感じがするようになったので，44回以降では，「奴」を使って当然だと思われるにもかかわらず，彼女は「奴」をこの1回しか使っていないのである。例を見てみよう。

(39) 李桂道：“娘且是說的好。我家裡沒人，俺姐姐又被人包住了。寧可拿器來唱個與娘聽，娘放了奴去罷！”(044/01b/09 ~ 10)

玉簪は李衙内家の小間使であるが，李衙内の妻が死亡した後，ずっと李衙内と同棲していた。しかし，李衙内が孟玉樓を娶ったので，玉簪はその地位を孟玉樓に奪われてしまった。玉簪自身は自分を李衙内の妻であると見なしていたのである。たとえば，以下のことから玉簪の態度がはっきり分かる。

(40) 赶着玉樓也不叫娘，只“你也我也”的。(091/11b/09 ~ 10)

(41) 又壓伏蘭香，小鸞，說：“你休趕着我叫‘姐’，只叫‘姨娘’。我與你娘係大小五分。”(091/11b/11 ~ 01)

(42) 當原先俺死了那個娘，也沒曾失口叫我聲“玉簪兒”。你進門幾日，就題名道姓叫我。我是叫手里使的人也怎的？你未來時，我和俺爹同床共枕，那一日不睡到齋時才起來。和我兩個如糖拌蜜如蜜攪酥油一般打熱，房中事那些兒不我手裡過。自從你來了把我蜜罐兒也打碎了，把我姻緣也拆散開了。(091/12a/08 ~ 12b/02)

玉簪が李衙内に「奴」を使って話しているのは、2例しか見えない。

(43) 這玉簪兒叫道：“爹誰似奴疼你，頓了這盞好茶兒與你吃。”(091/11a/10)

(44) 道：“好不識人敬重！奴好意用心，大清早晨送盞茶兒來你吃。”

(091/11b/05)

春梅は小間使であるが、かなり活躍している人物である。ときには、彼女は西門慶にたてつくことができる。春梅の使った「奴」のうち1回だけは結婚以前のものである。たとえば、例(45)である(この例についてはあとで分析する)。その外に「奴」を使用しているのは、周守備の妾になった後のものである。たとえば、例(46)、(47)である。

(45) 春梅便説：“好娘，説那裡話？奴伏侍娘這幾年，豈不知娘心腹？”

(082/04b/01～02)

(46) 這春梅晚夕哭哭啼啼：“好歹再添幾兩銀子，娶了來，和奴做伴兒，死也甘心。”(087/04a/10～04b/01)

(47) 春梅道：“便是因俺娘他老人家新埋葬在這寺後，奴在他手裡一場，他又無親無故，奴不記挂著替他燒張紙兒，怎生過得去？”(089/11a/03～04)

以上のことから、「奴」を使って話す女性は既婚を条件としているということが明らかになった。『金瓶梅詞話』の中で、既婚でない女性は「奴」を使わない。たとえば、玉簪、迎春、吳銀兒などである。ちなみに、「奴」を話す女性は大体20代・30代の人である。老婦人等が「奴」を使用する例は見られない。たとえば、王婆、薛嫂、文嫂などである。

次に、「奴」を用いる女性は必ず一定の地位を持つ人である。少なくとも、自分自身はそのような地位を持つと確信しているのである。前文に触れた12人はそのような状況である。特に、前文に分析したような李桂姐、玉簪、春梅である。李桂姐以外の妓女は「奴」を1回も使わないが、それは李桂姐のような特別地位を持たないからである。例(42)は西門慶が死亡した後、春梅が話した内容である。そのとき、家族内部における秩序は破壊され、潘金蓮は自分自

身を春梅の地位と同じだと見なした。このため、春梅も「奴」を使って話すこととなるのである。潘金蓮も春梅に「奴」を使って話す。特に面白いのは、春梅が周守備に嫁入りした後、貴婦人になったが、この地位に就いてから、よく「奴」を使うようになることである。春梅の発話は多く記録されているが、第82回4ページまででは、「奴」を使う内容は1回も見えない。例を見てみよう。

(48) 叫了聲“娘”，把我肝腸兒叫斷。自因你逞風流，人多惱你，疾發你出去，被仇人終把你命兒坑陷。奴在深宅怎得個自然。(089/08b/03～05)

(49) 春梅道：“好大矜子！如何說這話？奴不是那樣人，尊卑上下，自然之理。”(089/10b/01～02)

(50) 春梅說道：“你打的那道士，是我姑表兄弟。看奴面上，饒了他罷！”(094/05a/07～08)

(51) 春梅道：“不妨，奴就往俺娘那邊看看去。”(096/04a/03)

そのほかの登場する小間使が「奴」を使う例は見られない。ある小間使が謙讓語として使う自称代名詞は「奴婢」である。

(52) 老婆(如意兒)道：“爹沒的說，將天比地，拆殺奴婢，拿甚麼比娘！奴婢男子漢已沒了，早晚爹不嫌醜陋，只看奴婢一眼兒就勾了。”(067/14b/06～07)

(53) 婦人和他又在翫花樓上，兩個做得好。被秋菊走到後邊叫了月娘來看，說道：“奴婢兩番三次告大娘說，不信。娘不在，兩個在家明睡到夜，夜到明，明偷出私肚子來。與春梅兩個都打成一家，今日兩人又在樓上幹歹事。不是奴婢說謊，娘快些瞧去。”(085/03b/10～04a/03)

ここで、まとめると、「奴」を使う人は既婚であり、一定の地位を持っている女性に限定されることが分かるのである。

### 3.4. どのような聞き手に対して「奴」を使うか

女性が「奴」で話しするとき、男性を聞き手とする場合、その男性は必ず自

分より高い地位を持っている人である。たとえば、前文に触れた夫に対して「奴」が使え、女性が西門慶に対して「奴」を使えることである。聞き手との地位が平等である場合にも、「奴」を使って聞き手の地位が自分より高いと見なすことがある。たとえば呉月娘と李瓶児は互いに「奴」を使って自称する。

(54) 月娘道：“奴取笑，鬪二娘耍子。”(014/11b/06～07)

(55) 李瓶児道：“家裡沒人，奴不放心。”(014/12b/05～06)

特に指摘したいのは、陳經濟は西門慶の家族の女婿ではあるが、潘金蓮と陳經濟の間には、微妙な関係があり、場合によっては、潘金蓮が陳經濟に対して「奴」で自称することがあることである。たとえば、例(56)である。例外としては、潘金蓮が小間使としての秋菊に対して「奴」を1回だけ使っていることである。たとえば、例(57)である。

(56) 婦人笑道：“好，陳姐夫！奴又不是你影射的，如何唱曲兒你聽？”  
(018/12a/08)

(57) 教他瞧，躡的我這鞋上的齷齪。我纔做的恁奴心愛的鞋兒，就教你奴才糟塌了我的。(058/14b/01～03)

例(57)については、検討する必要がある問題がある。『金瓶梅詞話』の中で、「恁」という指示代名詞は形容詞・動詞・数量詞の前に置かなければならない。このセンテンスで、「恁」が代名詞としての「奴」の前に置かれているのは通らない。つまり、文法からするならば、やはりこのセンテンスは成り立たない。現在出版された注釈本はこのセンテンスを「教他瞧，躡的我這鞋上的齷齪。我纔做的恁双心愛的鞋兒，就教 奴才糟塌了我的」というような形で書き直している(梅節 1993)。このように直したことは正しいと思う。しかし、校正や注釈を行なう際、説明をしていないのは不適切であろう。

さて、表1における12人は、地位の低い人に対して「奴」を使ったケースがまったく見られない。ここで、呉月娘が「奴」を使ったことを取り上げ、典型として分析してみよう。呉月娘はどの小間使に対しても一貫して「奴」を使用しないのであるが、一方、春梅は周守備によめいりしたあと、その地位は高く

なった。以前、呉月娘は春梅を追い出したことがあるのであるが、その呉月娘が春梅と再会したときには、「奴」を使って自称しているのである。例を見てみよう。

(58) 月娘道：“姐姐，你自從出了家門在府中，一向奴多缺禮，沒曾看你。你休怪。”(089/10b/05～06)

(59) 月娘道：“我的姐姐，說一聲兒就勾了，怎敢起動你！容一日奴去看姐姐去。”(089/12b/08～09)

#### 4. 『三遂平妖伝』および『桃花扇』・『紅樓夢』における「奴」

『金瓶梅詞話』は明代の作品である。同時代に見られる「奴」はどのような使用状況であるのか、さらに清代以後、「奴」の使用状況がどのようになったのかは検討するべきであろう。ここで、明代の『三遂平妖伝』および清代の『桃花扇』・『紅樓夢』を対象として、「奴」に関して検討してみる。

##### 4.1. 『三遂平妖伝』における「奴」

本研究に用いた『三遂平妖伝』は馮夢龍(1574～1646)が改編したものである。この作品では、「奴」と「奴家」とが使われている。「奴」の出現回数は8で、「奴家」の出現回数は17で、合計25である。「奴」(「奴家」を含む)の言語環境は会話文である。「奴」を使って話す人物は媚兒と永兒の2人である。出現回数25の中、媚兒が使った「奴」は1回しかなく、残りの24は全て永兒のものである。例を見てみよう。

(60) 媚兒道：“叔叔將奴嫁個太監，有甚出息？”

(61) 永兒道：“家中母親教奴家買炊餅來。”

(62) 永兒道：“告爹爹，奴家自在裏面，只不出來，門前聽做買賣便了。”

(63) 永兒道了萬福，答道：“奴家為夫家遭難，隻身逃出，不及對爹爹說知了。”

(64) 永兒道：“客長若從鄭州過時，車廂裏帶得奴家去，送你五百錢買酒吃。”

(65) 胡永兒道：“大王！且不必憂慮，奴有一計，只教文招討在城外死於非命。他十萬軍馬，沒了主將，不戰而散，好麼？”

媚兒と永兒はともに若い女性であり、検討の結果では、『金瓶梅詞話』と同様、やはり既婚者であると見られる。具体的理由は以下のようである。

媚兒は小説の第三回で登場してから、第14回まで一貫して「我」で話してきたが、第15回に至って、おじとしての張鸞は雷太監と婚約させて媚兒を嫁にやった。この話を聞いた後、媚兒は「奴」を使って、前に挙げた例(60)のような発話をした。

永兒は正式結婚していないのであるが、永兒は媚兒の生まれ変わりである。この小説ではそのことを詩の形で次のようにまとめている。

君今不識永兒誰，便是當年胡媚兒。

一自妖胎成結果，凶家害國總由斯。

媚兒は生きていた間に、賈道士に愛を掛けられ、うわべは恋愛関係の形をとった。したがって既婚と見られたのである。賈道士の生まれ変わりである憨哥は永兒の将来の夫である。このことからするならば、媚兒の生まれ変わりである永兒は小さいころから、既婚であったと見ることができる。地の文では、以下のように書かれている。

這癡道士臨死，還一心牢掛著小妖精，為此一片精靈不散。那一世媚兒託生胡家，叫做永兒，道士託生焦家，叫做憨哥。雖然不得到老齊眉，也算做少年結髮，在姻緣簿上，勾除宿賬。此是後話不提。

『三遂平妖伝』を検討した結果としては、「奴」を使用する人はやはり既婚した女性であり、聞き手は話し手より高い地位を持っていることとなる。ただし、『三遂平妖伝』の登場人物の地位については今後さらに調べる必要がある。

#### 4.2. 『桃花扇』における「奴」

『桃花扇』は、清の孔尚任(1648～1718)が著した戯劇である。この作品では、「奴」と「奴家」とが使われている。「奴」は出現回数22で、「奴家」は25である。

「奴」（「奴家」を含む）の言語環境は会話文であるが、1回だけ小唄（小曲）の中で使われている例が見える。ここでは、その小唄は検討対象から排除する。検討の結果、『金瓶梅詞話』と同様に、「奴」を使って話す人物は全員女性である。

(66) 奴家已嫁侯郎，豈肯改志。

(67) 奴家脚痛，也説不得了。

(68) 你是侯郎，想殺奴也。奴家命苦，如今又不在那田家了。

(69) 奴家命苦，如今又不在那田家了。

(70) 誰知田仰嫡妻，十分悍妒。獅威勝虎，蛇毒如刃。把奴揪出洞房，打個半死。

(71) 丑：奴家鄭妥娘。

例(66)，(67)，(68)は李香君が話すもので、例(69)，(70)は李貞麗が話すものである。李香君と李貞麗とはすべて既婚者であり、聞き手はその2人より高い地位あるいは平等である地位を持っている。例(71)は「丑」（道化役）としての話である。戯劇では、「丑」はさまざまな立場や役回りを渡り歩くことができる特別な存在である。この「丑」による「奴家」は例外であると判断できる。

#### 4.3. 『紅樓夢』における「奴」

曹雪芹（1715～1763）が書いた『紅樓夢』においては、「奴」あるいは「奴家」が使われている。「奴」（「奴」を含む）が出現する箇所は26で、その中、詞曲で出てくるのは3箇所、ほかの23箇所は会話文である。会話文において、「奴」を話す登場人物は王熙鳳と尤二姐との2人しかいない。『紅樓夢』における「奴」の使用例はかなり局限されているのである。ここで全ての例文を挙げてみる。

(72) 鳳姐上座，尤二姐命 鬟拿褥子來便行禮，説：“奴家年輕，一從到了這裏之事，皆係家母和家姐商議主張。今日有幸相會，若姐姐不棄奴家寒微，凡事求姐姐的指示教訓。奴亦傾心吐膽，只伏侍姐姐。”説著，便行下禮去。鳳姐兒忙下座以禮相還，口内忙説：“皆因奴家婦人之

見，一味勸夫慎重，不可在外眠花臥柳，恐惹父母擔憂。此皆是你我之痴心，怎奈二爺錯會奴意。眠花宿柳之事瞞奴或可；今娶姐姐二房之大事亦人家大禮，亦不會對奴說。奴亦曾勸二爺早行此禮，以備生育。不想二爺反以奴為那等嫉妒之婦，私自行此大事，並不說知。使奴有冤難訴，惟天地可表。前於十日之先奴已風聞，恐二爺不樂，遂不敢先說。今可巧遠行在外，故奴家親自拜見過，還求姐姐下體奴心，起動大駕，挪至家中。你我姊妹同居同處，彼此合心諫勸二爺，慎重世務，保養身體，方是大禮。若姐姐在外，奴在內，雖愚賤不堪相伴，奴心又何安。再者，使外人聞知，亦甚不雅觀。二爺之名也要緊，倒是談論奴家，奴亦不怨。所以今生今世奴之名節全在姐姐身上。……所以姐姐竟是我的大恩人，使我從前之名一洗無餘了。若姐姐不隨奴去，奴亦情願在此相陪。奴願作妹子，每日伏侍姐姐梳頭洗面。只求姐姐在二爺跟前替我好言方便方便，容我一席之地安身，奴死也願意。”說著，便嗚嗚咽咽哭將起來。

(73) 尤二姐泣道：“既不得安生，亦是理之當然，奴亦無怨。”

例(72)は王熙鳳と尤二姐の会話で，例(73)は尤二姐と妹の会話である。このことから，やはり「奴」は一定の地位を持つ女性で，既婚を条件として，自分より高い地位あるいは自分と平等である地位を持っている聞き手に対して使用するものだと言い得るであろう。

## 5. 結論

『金瓶梅詞話』およびそれ以降の『桃花扇』・『紅樓夢』において，「奴」を使って話す女性は一定の地位を持つ人で，既婚を条件として，自分より高い地位あるいは自分と平等である地位を持っている聞き手に対しているということが明らかになった。また，『金瓶梅詞話』と同時代である『三遂平妖伝』では，「奴」を使って話す女性は，既婚を条件として，自分より高い地位を持っている聞き手に対しているということも明らかになった。だが，『三遂平妖伝』および『桃

花扇』・『紅樓夢』では、「奴」の使用回数はかなり減少している。現代中国語においては、この「奴」は姿を完全に消しているのである。今後、元代以前の「奴」についてさらに考察を行なう予定である。

#### 参考文献

呉福祥 1999『近代漢語語法綱要』, 湖南教育出版社, 長沙。

梅 節 1993『金瓶梅詞話』, 梅節校訂, 陳昭 黄霖注釈, 夢梅館, 香港。

馮春田 2000『近代漢語語法研究』, 山東教育出版社, 濟南。

呂叔湘 江藍生 1985『近代漢語指代詞』, 呂叔湘 著, 江藍生 補, 学林書版社, 上海。